

# いなかおか

東京都世田谷区歯科医師会会報

<http://www.setagaya-da.or.jp/>

Ⅲ

2004

No.148







## 東南アジア旅行の知的楽しみ方 「インド化」された国々へ 遺跡の旅—XX

下馬部会 斎藤 賢一

今回は日本でも良く知られた吉祥天こと、ヴィシュヌ神妃ラクシュミーのお話をしたいと思います。インドを始め東南アジア、日本でもラクシュミーは幸運と豊饒の神としてとても人気があります。ラクシュミーの出生については今までに何度もお話しした「乳海攪拌」の神話の中にあります。簡単に述べますと「不死の霊薬アマリタを手に入れるため、神々は魔族アスラと協力して、大海を攪拌するために巨大なマンダラ山を攪拌棒にして、これに長大なヴァースキー龍を巻き付け、龍の頭と尻尾を神々とアスラが交互に引きあうことによってこの大海から色々な宝物が生まれてきました。願いのものはなんでも生み出す聖牛スラビ、白馬ウッチャイシュラヴァ、聖象アイラーヴァタ、宝石カウストゥバ、聖樹パーリジャータ、天女アプサラ、月の神ソーマ、そしてついに幸運の女神ラクシュミーが蓮華の花弁の上に艶然と座って出現します。その美しさは周囲を圧倒し、光り輝いておりました。天界の音楽家や賢者は彼女の美しさを褒め称え、世界を支える聖なる巨象は黄金の水差しからガンジス川の聖水を女神に降り注いだ。この女神の出現で神々やアスラはこぞって求婚するが、女神は迷わずヴィシュヌを選びました。」と言う乳海攪拌の神話の一部分です。

ラクシュミーの寺院に於ける彫刻は「乳海攪拌」で出現した形、蓮華の上に座り又は立ち、2本又は4本の腕を持ち、左右に立つ2頭の神象（ガジャ）が女神の頭上から黄金の水差しに入った聖水を注いでいる姿で表されます。この姿をガジャラクシュミーと言います。また手には蓮を持つのが一般的ですが、ヴィシュヌ神の持物と同じ円盤や法螺貝を持つ場合もあります。日本では如意宝珠が好んで用いられます。ラクシュミーの彫像や彫刻はヒンドゥー教寺院のみならず、仏教寺院、ジャイナ教寺院においても見ることが出来ます。それではラクシュミー探求の旅に出発しましょう。

まずは一番古いマディア・プラデシュ州にあるサンチーの仏塔へ行きます。ここには第1塔から第3塔までありますが、この仏塔の東西南北には日本の鳥居と良く似ている石の門（トラナ）が立っています。このトラナを始め至る所にガジャラクシュミーの



写一「サンチー」西トラナ

彫刻を見ることが出来ます（写一）。この写真は第1塔の西側にあるトラナの彫刻で、紀元前3～1世紀に作られ、ラクシュミーは蓮華の上に立ち右手に蓮の花を持ち、左右から象が聖水をかけています。サンチーのガジャラクシュミーは立位と座位とが半々ですが、この後の彫刻は座位が多くなります。



写二「ダシャーヴァターラ寺院」ディオガル

ウツタル・プラデシュ州のディオガルにあるダシャーヴァターラ寺院の彫刻はインドで一番素晴らしいと思います。ここにも6世紀に彫刻されたガジャラクシュミーの最高傑作があります（写二）。赤色砂岩で作られた蓮華に座すラクシュミーは顔が少しかけてしまいましたが左右の



象もとても良くできています。



写-3 「クンティ寺院群」アイホーレ

南インドのカルナータカ州のアイホーレにあるクンティ寺院群のガジャラクシュミーです(写-3)。両方の手に蓮の花を持ち、左右対称の構図です。7世紀



写-4 「インドラギリの寺院」シュラヴァナベルゴラ

の製作で台座の下に当時の文字が見えます。同じくカルナータカ州のジャイナ教の聖地シュラヴァナベルゴラにあるインドラギリのジャイナ教寺院で見つけたガジャラクシュミーの彫刻です(写-4)。ジャイナ教は仏教とほぼ同じ時代に成立した宗教でマハーヴィー



写-5 「ゴーマテーシュワラ像」シュラヴァナベルゴラ

ラを開祖とします。その教えは仏教によく似ていますが、さらに不殺生、無所有を徹底させたものです。シュラヴァナベルゴラの丘の上には18mもあるマハーヴィーラの子、ゴーマテーシュワラの巨大立像があります(写-5)。ここに行くには灼熱の石の階段を裸足で20分も登らなければなりません。まさに修行です。



写-6 「ヴァラーハマンダパ」マハバリープラム

南インドのタミルナードゥ州マハバリープラムにある石窟ヴァラーハマンダパには7世紀に彫刻されたガジャラクシュミーがあります(写-6)。このガジャラクシュミーは左右対称ではなく、向かって左側の象は頭上から聖水をかけていますが、右側の象は鼻を下げています。この構図はマハバリープラムの特徴のようで、同じアディヴァラーハマンダパのガジャラクシュミーも同じ構図です。

さらに南下して海を渡りスリランカに行きましょう。スリランカの仏教遺跡にもガジャラクシュミーはありますが、興味深いのはポロンナルワ遺跡にある巨大なテーブル状の石碑ガルボタです(写-7)。12世



写-7 「ガルボタ」ポロンナルワ



紀に作られたこの碑文はニッサンカマツラ王の偉業を讃えたもので側面にガジャラクシュミーが彫刻されています。



写-8 「ウッタナダラ寺院」パガン

さて東南アジアではどうでしょうか。ミャンマーのパガンにあるウッタナダラ寺院のテラコッタの破風にラクシュミーが彫刻されていました(写-8)。蓮華の上に座し、手に蓮を持ち左右には天女が蓮を捧げています。12～13世紀の製作で残念なことに保存状態があまり良くありません。ミャンマーではこの構図を良く見かけます。

東北タイにある11世紀のクメール寺院カンペンヤイのまぐさです(写-9)。典型的なクメールスタイル



写-9 「カンペンヤイ寺院」東北タイ

ルでカーラの上の蓮華に座し、その左右には天女が蓮を捧げ、さらに上部には象が聖水をふりかけています。

カンボジアで特筆すべきはアンコールにあるプラサットクラヴァン寺院です。10世紀にヴィシュヌ神に捧げるために建立された寺院で、5基のレンガ造りの祠堂が南北に並んでいます。一番北の祠堂の内部にラクシュミーがレンガに直接彫刻されています(写-10)。

立位で4つの腕の内、後の腕にはチャクラ(円盤)と蓮を、前2本は印を結んでいます。左右には天女を控え、顔立ちや衣装はともクメール的です。

ベトナムの遺跡は度重なる戦争でほとんど破壊されてしまい、残っている遺跡ではラクシュミーは見つかることが出来ませ

ませんでした。しかしダナンにあるチャンパ博物館で9～10世紀の製作と見られるガジャラクシュミーを見つけました(写-11)。



写-10 「プラサットクラヴァン寺院」アンコール



写-11 「チャンパ博物館」ダナン

インドネシアでは東ジャワの山の中にあるチャンディベラハンの遺跡を見なくてはなりません。ここはアイルランガ王の霊廟の一部で沐浴場になっています。この沐浴場には2体の彫像があります。1体はシュリー、もう1体がラクシュミーです(写-12)。ラクシュミーは4腕で2本に蓮を持ち、2本で乳をおさえ、乳首から水が流れだし現在も近くの村人の生活用水となっています。11世紀にアイルランガ王が建立したもので、1000年もの間、村を潤し続けています。

日本においても吉祥天として人気が高く、「毘沙門天」の妃であり蓮華の上に立ち、左手に如意宝珠(何でも望み通りに財宝を取り出すことが出来る)を持つ





写-12 「チャンディベラハン」  
東ジャワ

世紀後半の吉祥天像は麻布に描かれ、剥落が多いが金箔が残っており、左手に如意宝珠を乗せ、顔は唐美人を想起させます。躍動感のあるS字形の姿勢と身につけた薄物の微風をはらんで翻る様はまさに奈良時代の最高傑作です(写-13)。薬師寺では常時公開しておらず私が見たのは正月で、金堂の薬師三尊の前に何気なく置かれていました。このへんが京都と違い仰々しくしない。京都の寺は見せてやるという気概が感じられ重苦しい感じがします。奈良の寺はどうぞ見てやって下さいと言う懐の広さが感じられ、それは天平の建物と平安の建物の違いでもあり、人々の性格の違いなのかもしれません。

浄瑠璃寺の吉祥天立像は1212年頃の作とされ、肉身を胡粉で白く塗り、美しい色彩を残しております。薬師寺の画像は唐風の母性的な美人像ですが、この像は中国宋時代の装飾に近く、豊かな



写-13 「薬師寺」奈良  
写真/飛鳥園

姿で描かれます。「金光明経」や「金光明最勝王経」等の教典に、国家的な平和や繁栄を、また個人的にも財福を与える存在として登場します。吉祥天像は沢山ありますが薬師寺の画像と浄瑠璃寺の彫像は見なければなりません。

国宝に指定された薬師寺にある8

黒髪を肩にたらし容姿から初々しい潔癖さを感じられます(写-14)。この像も鎌倉時代の傑作の一つです。やはり常時公開しておらずこの像も正月に見ました。浄瑠璃寺は九体阿弥陀堂とも呼ばれ、内部に九体の阿弥陀仏が横一列に並んでおります。吉祥天立像は厨子の中に入っており直ぐ間近で見られます。厨子の内部も仏や天女が美しい彩色で描かれ、まるで天にいるようです。

仏教伝来より如来や菩薩が中性的な存在であるのに対し、吉祥天と弁財天は仏教における数少ない「女性」尊であり、そこが人気にもなっていると考えられますが、後世には同じ福德を祈願する弁財天に人気が移っていきました。また七福神信仰の初期においても、参加していましたがその後、福祿寿に入れ替わっています。

インドでは毎年10月から11月の間の新月の晩にディワリーと言うラクシュミーのお祭りがあります。幸運と繁栄を願う人々が家々の戸口に灯明をともし、入口の周りに小さな足跡を描いたりして女神を招きます。都会では明るいので、ぜひ田舎に行って新月の暗闇にたゆたう灯明のなかにラクシュミーを探しに行きたいと思います。



写-14 「浄瑠璃寺」京都  
写真/永野鹿鳴荘